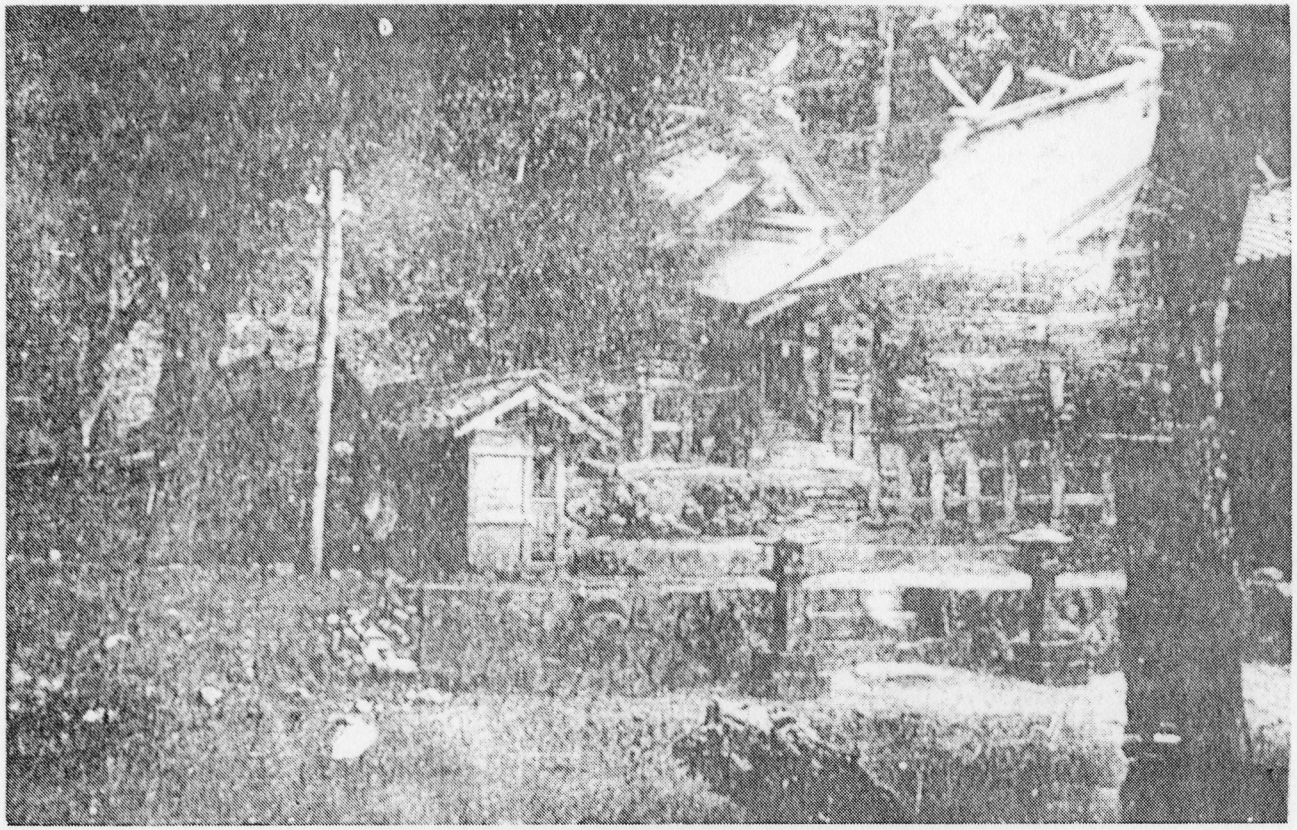
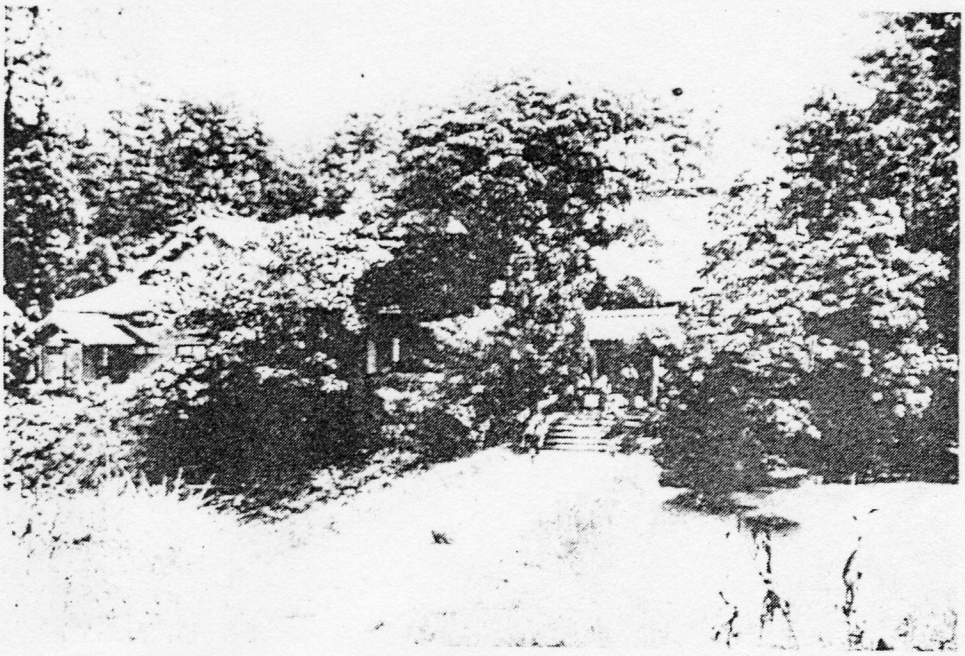
(一)



石見國二宮式内縣社多鳩神社

(二)



曹洞宗太平寺

(三)

新開佛

二　宮村史

持統文武兩朝に仕へた柿本人麻呂の歌に石見乃海角乃浦とあり、醍醐天皇の時の延喜式に多鳩神社、夜須神社、大飯彦命神社があり、其の後まもなく出來た和名抄に那賀郡都農郷が出て居る。

これ等が、此の地方の記事の中央の記錄に載ったはじめである。しかし、これが此の地方の歴史の始まる時では無い。無論、人間の初めて住んだ時でもない。

人が、此の地方に住んだのは、遠い昔の大古、神武天皇よりまだ前の、人間が金屬を使ふことを知らないで石の器具を使った時代の遺物の石斧（寫眞二）が本村から出たのや、耕作せぬ時代のマナの話や、貝割地藏の貝塚傳説で、充分證據だてることが出來る。

石斧

石斧は、本村の神村から跡市村の千田に通ずる道路を改修する時、神村の唐島屋森與吉外數人で仕事最中出たので、まだ澤山あったさうだが、何物とも知れず又取合ふ人も無く、道か谷のどの邊かに再び埋もれてしまったのに、唯一個、發見功勞者森から神村間名口堀國市の手に渡り保存せられたのである。

神村切岡三〇號に、眞名口とあり、神主太平寺の明和安永の過去帳に、マナロ甚助の子や孫の記載がある。堀氏は福屋の支族堀小太郎重利の後だと傳へ、それ故伊勢神樂が神村に來た時、庄屋より前に大神樂を打つ習慣が、前々あったと言傳ふ。古城跡城野の南東に在り。唐島屋も

マナガエキ

遠くは無い。

昔の昔の大古のトントムカシは、人の數も少く皆朴直で神のまにまにエラギ遊びくらしたものだ。自然に出來ている木草の實を食ったり、鳥や獸を捕らうと思へば、エラのマナガエキといふ所に行って待って居ると、そこへ鳥獸が出てくるので、たやすく手取にしたといふ。魚が欲しいと思へば、マナが池に行って水をぱちゃぱちゃ云はすと、魚が浮いて來て、たやすく掴まれたといふことである。そうこうするうちに、人間に慾が出來て、入ってはならぬマナノ山に入込んで多分に取り、又は取って かこふ様になった。そうしたら神の特別の賜物が無くなって、色々の道具をこしらへねば鳥獸魚など捕られぬことになり、田畑を作る仕事をもせねばならぬ様になって、エラ（歡喜）の境は、忽ち、爭ひの界となり、苦勞といふものが湧いて出た。

エラ

エラは、エラグ（歡喜、嘘樂）エム（笑）などと親類筋の語で、外國人のバラダイスとか、エデンの花園とかいふのと似たものである。神主全闘二の二二、二三にエラあり。二四にマナガエキ、マナガ池がある。別境ではない。柿本人麻呂の妻惠良媛はエラの人だといふ。

マナとは、今でも稀に豆や海の魚などが、ふることがある。やはり、それをマナといって居る。天からふったもので神の賜物と思ふからの名だ。實は、遠い所のたつまきであがったのだらうが南洋で神秘力をマナといふ由、原始時代研究上二八に出で居る。意味用法は違ふが、相關する點もある。

貝割

家名マナガエキは非常に古くあった。それから分れた家神出田、前木屋、正木屋など皆、大畑を氏とし、ただ有が迫は吉田を氏とす。エラのナカヤといふ舊家の分家岩木屋亦大畑を稱ふ。

前木屋、正木屋、岩木屋互に關係があるらしい家名だ。

太平寺の過去帳に、天和四卯四月九日機室道全沙彌大畠九右衞門父、貞享四卯九月十一日道秋禪定門大畠三助父、元祿十年大畠喜助、寶永三年大畠三助以下數十百の記載あり。享保九年神主ノ大畠新三郎子、享保十一年大畑新三郎娘あり、大畠、大畑どちらの字をも書く。しかし、惠良神主のが、大バタといったことは、寛政六年大ばた九右衞門子、文化元年大ばた甚六子と假名書の證據あり。これに對し、神村の大畑は大バタケといったことは今も本家の家名地名に殘り、安永二巳正月二十八日休心禪定門大バタケ米松父とあるので分る。

神村切闘二二號に大畑ケあり、同じ家名あり、分家に坂本屋、孫分家に瀧本屋、榮屋あり。同號闘に庵の本あり、一二號闘に餅田あり、大畑ケと同區に竹屋孫分家福本屋あり、以上皆大畑を氏とす。ただ竹屋の分家曽根大迫を稱ふ。

惠良神主派は、ズッと古くあり、禪宗（曹洞）で、神村派は、稍後れて眞宗に屬す。

神村の貝割といふ所は、古い昔、魔所といって淋しがって、夜通ることをきらったものだ。それは餘所にアヅキトギが出るといふ様に。夜がふけて四方が物靜かになればなる程、メジメジメジと貝をくだく様な音が大きくなって、唯わけなく背がゾッとして身がふるへた。それで迫々人通りも少く

なったが、或夜或人は、どうでも通らねばならぬこととなった。峠の地藏の入れ智慧で、眉につばきをつけて通りかけた。ところが、驚いたぢゃないか、そこの地藏尊が錫杖を長くして遥か前の清水が尻の海（其の當時、口屋のかみ、イタコソ清水が尻まで入海であった）に漬けて、暫くてし追々に錫杖を短くすれば杖に附着して居た貝がポロポロ落ちて、あたりに山をする。それを地藏が貪り食ふ。その音か例のメジメジ、頭のテッペンから足の爪先までひびく。たまげたのたまげないのオッタマゲて、すんでのことに尻餅を搗くところだったが、峠の地藏尊から通力を分けてもらったおかげか、足ふみしめ、ふるひ、〳〵大音あげて、何と地藏どん、菩薩とて佛に近い身を持ちながら、その有様は何事ぞ、殺生は佛の重き戒なるをと、しめつめをした。ニコニコの地藏顔を赤め、生臭い手で頭をかきかき、ヤァこれは、きついお叱り、何とも申わけが御座らぬ。以後きっと悔い改める。そのしるしに、食った貝を活かして、もとの通りにかへす。それで御こらへを願ふと、追々眞顔になり兩手をついた。なる程そうなると許してあげう。待て待てもう一度眉に唾をつけねばならぬぞ。そこで地藏は、のどに指を入れてゲッゲッたぐり、吐いて吐いて吐きぬいた。出るが出るがゾロゾロゾロゾロ、あたりに散らばる貝殼を身につけて、蟻子の寺參りの様に這ひ出し、ウヨウヨウヨウヨ列をして、谷をわたり岡を越え、溝を飛び川に入り、とうとう、もとの海に歸った、ところが、中には貝殼を、え見出さずに、身ばかりウジャウジャして居るのがある。これではならぬと地藏どんは、側の榧の大木の實を振ひ落し、錫杖をころがして殼を割り、それを與へたれば、殘りのむきみは榧の殼をつけて、ウヨ

ウヨウヨウヨ海に歸って、めでたく事がすんだげな。

その時見おとされた貝殼が、今も貝割地藏の近くの土の中から、時々澤山出るのである。

此の話は、德川時代の初期、周布長晴の未亡人德子（世に大婆様といふ）の隨筆「聞くがまゝ」に在り、地藏信仰の盛になった鎌倉時代か、それ以後、貝塚、榧の木、石地藏の存在に附會し、佛智不思議を具體化したものであらう。如何程ヒイキ目に見ても、佛教渡來以前の話とは、どうしても言はれぬ。それを、なぜ、古い古い此様な所に持て來て記したかといふに、話は後の世の物でも、その中の貝塚は、神代も神代ズット古い方に屬する、貝を常食とした時代の遺跡があったことを物語るからである。

神村切圖二八號に、カヤワリ地藏、カヤワリ、カヤ本屋などあり。家名貝割、貝割部屋は、共に能美氏を稱ふ。能美氏は吉野朝廷以後に來て、本村の歴史にも關係があるから、其の時述べよう。

イタコソ

スサノヲの尊は、韓國ソシモリの地にお出になったが、ここは居心地が惡いといって、御子イタコソの命大屋媛、抓津媛を連れて、長門の須佐の神山（カウヤマ）を目當にこちらへお出になった。出雲へ行かれる途中、石見の海路をよぎり、海ばたのあそこ、ここに立寄なされた。その時頃、此の里の海は神主の口屋宮倉より東南、今いふイタコソ清水が尻邊まで、入海であった。そこへ聞い聞い椀の様な舟に乘って來られた。スサノヲの尊は吹く息は木枯し青山を枯山なす冬のすさびの神。イタコソ

の命は涙は春雨吹く息は春のソヨ風、枯山を青山なし、木草に花を咲かす春の木草の神。大屋媛は冬洞夏家の家をつくるたくみ（工匠）の神。抓津媛は肩させ裾させ寒さがくるといふ秋ムシの紡ぎ織りの神。

此の中で、タッタひとり、あがってやるが、誰を望むかと士人に向いて言はれた。士人は、スサノヲの尊は、いかめしい近よりにくい方、大屋媛は切ったりついたり其の外何に使ふか分らぬ恐ろしさうな色々な道具を持つ方、抓津媛はしとやかながら心の底の知れぬ様で長い爪を持つ方、それで、なさけ深さうなイタコソの命を招いた。みことは岡に上って土の様を見て、木の種を蒔きなされた。それで、此の里は外の村に比べて木が多く、それにつれて良い水が澤山湧いて出るといふ。だが大屋媛が上りなされざったから、大分後の代まで黒木を葛で結んで建てた家があったと。（寫眞表紙）

神村切嗣三八號にイタコソ清水ケ尻あり。一二號に清水ケ尻あり。清水尻といふ家と平木屋とは清水を氏とす。一八號に葛屋敷（カヅラヤシキ）といふ地名家名あり、森脇を氏とす。

邇摩郡溫泉津小濱にスサノヲの尊、宅野に抓津媛、礎竹に五十猛命、大屋に大屋媛が立寄なされたといふ。五十猛とイタコソとは同神らしい。

出雲國出雲郡（今の簸川郡）に韓國伊太氐神社三社、意宇郡（今の八束郡）に同名の社三社あり、伊太氐は、もと伊太祇（イタキ）なるを伊太祇と誤り祇の畧字で伊太氐となったものであらう。

（マト（バト））

紀伊國名草郡に伊太杵曽郷、伊太祈曽神社、大屋都比賣神社、都麻都比賣神社が續いてある。備後國に板木といふ所、壹岐國に伊宅郷がある。イタコソのコソの例には、比賣語曽がある。

人々、マナに頼って神のまにまにエラギくらしたことは、夢と消えたが、まだ其の砌は、獵をするにも獸のいつも通るべきウツの近くに小屋を結び作り壁も屋根も生柴でしつらひ、それを鹿屋（ししや）といふ。その中に、竹木の槍など持って待ち居り、獸の通る時、だしぬけに突き刺し、たやすく取るのであったが、追々には、弓矢の様な飛び道具を作らねばならぬこととなった。

マナの夢醒めやらぬ時、海の魚はどうして取ったかといふに、タマトの神の、みたまのふゆ（恩頼）に頼って得たのである。タマトの神は、潮干る玉と潮滿てる玉とを程よく使うて、滿潮について來た魚が、引潮に逃げ後れて渚にピチピチして居るのを、人々に取らせた。

來る日も毎日、似たことであった。ときに或へウキン者が、その大切な玉手箱を、神様にだまってソロッと持出して、一つの玉を海に投げ入れた。そうすると海の水がグングンふえてやってくる。間もなく股を越えた。ほそ（臍）までたたへた。泳ぎは知らず。サァ大變ほたへて（うろたへることを、ほたへるとは、此の時から言うたと）殘りの玉を箱ながら投げ出さうとしたが、イヤそれで海の水が皆乾たら困るマァかうしてやらうと、帶をといて箱に結びつけて、他の端を握って水に入れた。アラ喜ばし、忽ち水は引はじめた。それはよいが引いて引いて、ついて行くまいと思うても、ふみ止まらうと思うても、どうしても引っぱって行って、はてしがない。助けて助けてと、ひゃこった（さけん

だ）が、答がない。天つ神、國つ神、よもやまの神たち救はせ給へと祈ったが、しるしが見えぬ。望みの綱は切れた。モウ放さうかモウ放さうかと幾度も思ひながら、眞心の祈を祈にさゝげつつ、マァマァと、ついて行くうち、ヤレうれし。馬潟のムリン島に引かかった。その時から大潟が出來てムリン島に續いたげな。ヘウキン者は、大に悔いて、タマトの神の御前に行って、ことわりを申し、潮滿てる玉を尋ね出すから、赦し給へと願った。それから日毎に、雨のふる日も風吹く夜はも、雪やあられのたばしる時も、浦は七浦八百八日尋ね通したが見出されぬ。無くなることをみてるとは此の時からいふと。その八百八日目の日に、タマトの神の仰せられるには、出來湧いたことでしかたがない、汝のまめやかさにめでて赦してやる。これからは皆々釣を垂れ網を引かねばならぬと、そのしかたを教へ、又ヘウキン者と其の血筋は、大イサリとて沖に出て取らねばならぬことと定められた。又仰せられるには、人間は何時又どの樣なことをしでかさぬとは限らぬ。吾は玉と共に此の山にこもらう。汝等と汝等の血を引いた者、願の趣あらば、八たび手を拍って我が名を呼べ、吾は何時にても話相手になってやらうと、其の儘、御身を隠したまうた。今に其の山をタマト山といふ。

今タマト山無し、タバト山なること明か。神主全圖二號の六に多鳩山、多鳩神社がある。マとバとの相通轉換は、くばる、くまる（配）すばる、すまる（星名）、せまい、せばい（狹）、まる、ばる（放便）など多く、字音でも、馬鹿のばの字は轉馬のまの字など少くない。（寫眞一）

ししや（鹿屋）は神村切圖二一號に在り、大鹿ケ平も近くに在る。鹿屋といふ家名氏あり、當主を鹿屋菊太といふ。鹿をシシと讀むは古語の殘存。

ヘウキンといふ語は、唐宋音か。古傳は、おどけ者とか何とかあったのを、後にいひかへたか。ほたへる、みてる等の説明、ことばの遊戯は、神代から少しは有ったらしいが、奈良平安朝に大にはやったものだ。人間道具も佛教渡來後の語。

天孫人種六千年史に曰、住吉郷を古く玉野國ともいった。タマはセミチックバビロニアン語のチャマット（tiamat）タマトで海神の義の畧、海神豐玉姫、玉依姫の玉と同語である。尤も神の決定詞 ziu を附けねば、海の義となるが、原始時代の地名は、殆ど神名に負ふ例なるが故に、玉野國とは海神國を意味する。住吉神社の攝社大海神社は實に玉出島に鎮座。

姓氏錄右京神別地祇八太造は和多罪豐玉命兒布留多摩乃命乃後。コリヤク語で海神はトヨコト。

鳥居博士極東民族

馬潟のムリン島、馬潟の地名今此の地方に無し。ムリン島は、二宮村大濱地續き農漁部落の名で島で無く、田波村敬川に屬す。馬の滿洲語ムリン。

大イサリといふ家は今無し。太平寺過去帳に、延寶三乙卯三月十九日淨春禪定門俗名大イサリ

甚右衞門父、元祿九丙子七月十三日妙秋禪定尼俗名大イサリヲイト母とある迄にて後見當らず。

タケツノミの命。ツノの里の鴨の宮（神主全圖三號の一飯田分カンノ宮、風呂ノ元邊）に居て長門の角島を中倉とし、日向のツノの郷に往き來しては、此の里に歸り、出雲の神コトシロ主、アヂスキ高

彦ネの神たちと、鴨山のタカ臺で、品物のかへかう（貿易）をなされた。其の頃は、錢が無いから、物と物とかへかうするのであった。これ（貿易）を其の頃鴨といふ。鴨は寢るのに向き合うて互に首を入れかはす。所謂鴨の入れくひで、ことが似て居るから云ふのだ。

タケツノミの命は、出雲の神のうから（氏族）丹波のキズ耳の娘と、めをとになり、妃をば此のツノの里に居らせ、自らは、あちこち出あるきなされた。すめらみことの東に出でます時、安藝のエの宮から御使が來たので、今度は、めをとづれで高角山から舞立って（飛立つ程喜ぶことか勇み立つのか）先づ丹波に行き、大和お討入には、熊野路のけはしい迷い道を、先に立って案内した。此の時兵士共は、くたびれて、なかなかついて來ぬので、タケツノミの命は、うらが通りにこがあして歩け、カァ（ツイ）其處だカァ峠に上るとカァ見えると、いかにもたやすげに、カァカァ石見ことば、まる出しでやるので、つい行く者笑ひこけて、少しはくたびれがなほり、命に八咫烏のあだなをつけた。

妃も亦、先に立って、女の通られる道を、男が行かれぬことがあるか、イカコヤ、イカコヤといひながら、道教へ蟲の様に、どうしても何ぼう足か先に居る。イカコヤは行かう來いといふ出雲ことばで、サァ共に行かう來れの心である。これからイカコヤ姫と名つけられた。夫婦共、手柄が多かったので、お上から宮か建てられた。

鴨山の高臺は、今の高神の岡であることは疑がない。鴨の宮（カンノ宮）と惠良川（平石川）を隔てゝ居る。鴨の宮に對して鴨山を高鴨といひ、それが高神となったか。人麻呂が石見國で死に臨み鴨山の磐根しまける（枕にする）と詠んだ所は、高神の岡の南麓、あざ名柿ノ木本、あざ名四十八といふ所である。神とカモとの相通の例は、遠江のカモガヤは神谷と書く。アイノ人は神をカモイといふ。

高角山は、星高山、島星山などともいひ、その西麓、二宮村に屬する神村切闘一六號に丹波地、鳥ドイ、鳥クヒあり、家名丹波地、本姓は舞立であるのに、微兵令發布後藤田姓を冒したが、分家福吉屋はやはり舞立を氏として居る。南方跡市村の舞立も關係がある。角山は都野津の宮山で都山ともかく。都ノ山とノを添へて讀むのである。

大和國宇陀郡に高角神社あり、神倭伊波禮比古命、賀茂建角身命を祭る、八咫烏神社もある。

丹波國桑田郡に神野神社あり、伊可古夜日女を祭る。

コトシロ主の神が此の里に宿られる時は、タバトの宮に居ましたといふ。（寫眞一）

アヂスキ高彦ネの神の遺跡は本村に無けれど、其の妹下照姫の鶯宮、鶯社は神村に在り（寫眞六）事代主命と建角身命とは、人間風に考へると、少し時代が違ふ様にもある。併し角又は角身がワタツミ、大山祇の様に、部族とか氏族とかを指すのであらうか。角は地名にも氏にもなった。

角はズッと古くはツン又はツヌと云ったであらう。後の世のいひごとではあるが、小川氏は角氏でツンとすまし込んで居る。小川に似合はぬ大顔は、高竹、タカウラ（竹原）、竹ノ下、ま

だも威張るが脇かくし。といふ語がある。後に中原姓の領主が都野氏を稱へた時、遠慮して角をカドと讀かへた。角玄井といふ醫者が居た。それで、高竹（小川氏）の分家に加戸氏がある。天明五年の調べに凡千五六百年も相續する世代はしかと分らずとある。そうすると今から千七百年餘前となる。書紀年表の神武紀元と八百年も相違がある。書紀と古事記とでも大分違がある位で、地方の傳説に年代や事實の不つき合ひがあっても、眞を含んで居るか、非常な古色を帶びたものは採るがよい。中央の記錄の誤を正し缺を補ふことがある。

アラヒト　大から國の王ウシキアリヒシカンキ、大やまとのすめらみことの御顏を拜まうとして、長門國に渡り來たが、其處の井筒彦といふ者に妨げられ、石見國の方に廻り、角の里に着いた。牛を連れて居たので田を耕し鋤くことを教へられた。多くの田を開き多くの稻を作られた。人々敬ひてツヌガアラヒトといふ人の體を持ちながら其の儒神であること、ツヌは此の地の名のち飯田といふ。ガは梅が香、天が下などのガで、之（の）の心、ツヌの現人神といふことである。居られる間に牛が死んだ。厚く葬って牛タマと祀った。後に越の國ケヒ（笥飯）の浦に行き、とうとう思ひをとげた。

飯田

アラヒトさんを祭った宮を、大飯彦命神社といひ、中古は盛であったが、今はひどく衰へて、家名森脇高尾氏持として僅に在る（寫眞四、五）

森脇の分家中土居も高尾を稱ふ。飯田の高尾氏が高王と書いたこと、九十歳の種三郎老が言ふのみでなく、文政年間染抜きの幟あり、二百五十年程過去帳で分るので三百年以上の家だらう

との世評だが、實際は、それより非常に古い。それはウシキ・ウスギ・ウツキ等は朝鮮語で、高く聳える心で、アリヒシは南、カンキは王だから、ウシキアリヒシカンキは、聳南王、高王と譯して差支がない。全くは韓語の心を忘れぬ中、漢字の渡った當座、意譯したものだらう。

神村

姓氏錄に、辟田首（ヒラタノオビト）任那國主都奴加阿羅志等之後也とあり。神主全國二號一八に平田といふ宅田畑山あり、下平田といふ宅畑田あり、戰國時代、舊血統絶えて宇津卷系織ぎしと大倭國シキ瑞垣宮に居まして天の下知しめししミマキ入彦イニヱ天皇（崇神）の御世に天つ社、神邑（カミムラ）神戸（カミベ）を定め、此の里に神邑、神戸を置きたまふ。此の里ではカムラといふ。

神邑は神村とも上村とも書き、獨立の一村であったが、市町村制實施の際、二宮村の大字神村となる。神村切圖一一號に陣後、上陣後あり、神戸を後の世に音でジンゴと讀み、（クニノミヤツコをコクソウと音でいふ樣に）又後に當字したものである。美作國にも神戸（カムベ）をジンゴともいふ所あり。同じ一一號に神田、下神田、一二號に上神田、三五號に鮴田あり。神田をジンデといふ。ジンデンの畧。鮴田はカミダの訛であらう。家名下神田に佐々木姓の舊家住す。

國造

神村を氏とした者あり、戰國時代神村下野守長武は軍記物語等に出て、人の多く知る所だ。

瑞垣宮（崇神）の御時、紀伊國造と國じ先祖から出た薩佐奈朝命の兒大屋古命を石見の國造（クニノミヤツコ）と定めたまふ。

其の系圖は色々あって、一つに定めにくいが、凡そ次の通りである。

天道根…ヒコマヤマトー鬼トネクシタマーチナソ┐大ナ草彦ーウチ彦
　　└蔭佐奈朝ー大屋コ

天道根命の祖を鴨武津身（建角身）命としたり、天神玉命ー天櫛玉命ー鴨武津身命と書いたのもある。かうなると石見國造任命の經路が幾分か考へられる樣で面白いが、餘り古い傳であるまい。

マキムクノヒシロノ宮（景行）天皇の御時、ウマシマチの命の後物部竹子連（ムラジ）を石見の國造と定めたまふといふ。

大屋古命のことは國造本紀に、竹子連のことは物部神社々傳、物部系譜などで、知られる。

國造任命は、二宮村史に直接關係が無い樣だが、神主のことを述べるに無くてならぬから掲げ

角山君

たヤマト國ワキカミ池心宮に居ましミマツ彦カエシネ天皇（孝昭）の御子アマタラシ彦國オシ人の命のお血筋がこのあたりに、はびこり（蔓延）なされた。時は長い間にわたって居り、たしかに切って言ふことはできぬが、多いか少いか石見に關係あるもの次の七つ。

一、都努山臣の支族角山君は、應神天皇の時、この地方の山守部となる。都野津に角山（都ノ山）、跡市、江津、都濃、二宮の四町村の間に、高角山（島星）があり、角山の君の古墳は、神主から千田有福に越える山道の右に在る（寫眞三）。角山の君の小き屋敷跡は、神主から飯田に行く所に在り。

柿本臣

後に遺跡が佛庵となり君寺といったのを、德川時代に石見三十三番札所を選ぶ際、西國三十三番にならって紀三井寺といったけれど、今に口で君寺といふばかりでなく、それ以前の古文書には、悉く君寺と書いて居る。（寫眞一九）今は廢寺となったが、手を失ひ首體分離した君寺時代の古佛を存す（寫眞一八の眞中）

二、小野首とそれから出た柿本臣後に朝臣となる。敬川、三隅に小野といふ部落あり、美濃郡に中古小野郷、今小野村あり。小野村、其の隣高津町、本村の隣の都野津町に柿本神社あり。本村惠良に人麻呂終焉の地がある。

三、津門首。角の里（都農郷）から分郷した都於（つのへ）郷波子に、津門神社がある。

四、櫛代造。本郡國分村久代、美濃郡吉田村久城にクシロを冠した神社がある。

五、猪甘首。伊甘郷下府に伊甘神社、上府に伊甘山安國寺がある。

村部（大領、カギトリ）

六、久米臣。柿本朝臣同祖、天足彦國押人命五世孫大難波命之後也。那賀郡の豪族で代々郡司を勤め村部を稱へたが、清和天皇の貞觀九年、大領村部岑雄、主帳村部福雄は、朝廷の許を得て、舊姓久米に復した。此の本系は、都農郷から石見郷に郡家移轉と共に移住して居たので、本家分家の緣が、餘程うすくなって居たと見え、神主の迫、前迫田に殘った者は、やはり村部を稱へて、多鳩神社のカギトリをして居た。サコノ邑部母妙心禪定尼、享保八癸卯十一月九日死を限りとし、翌年からは、多鳩神社の大祀（ハフリ）大崎氏の姓を冒し、後山本を稱へて現存す。此の氏の長者は、大寶坊の

旦家でなければならぬ。

七、和禰臣―春日臣―市河臣―神主首―布留宿禰。天足彦國押人命の孫ヒコヲゲツの命の子彦國葺の後米餅搗大使主命の血筋和邇臣をとなへ、後に春日臣といふ。崇神天皇、太后の弟イカガシコヲに命じ、神武の神劍フツノミタマを石上郷に祀らせた。物部氏である。垂仁天皇の御世、朝廷大刃一千口を作り、石上神宮（イソノカミフツヌシの宮）に納め、春日臣の族、名は市河といふ者に治めさせられた。これは大方物部連の副として仕へるであらう。それから後市河臣と呼ぶことが多い。仁德天皇の御世、フツヌシの宮を石上郷布留村高庭（タカバ）の地に建て、市河臣を神主となされた。ここの神主といふ語は神職といふ心の普通名詞で、姓氏でない。神寶武器保管では、物部連が主任となり、祭祀は市河臣が主任で、協同一致奉仕したのであらうか。

神主首

皇極天皇の時。神主市河臣武藏といふ者が蘇我蝦夷大臣のいひつけで、物部首並に神主首と號した。物部首は、前に記した神寶武器保管主任や石見國造の物部連とはちがひ、神主首は前記の神主と同じ家ではあるが、かうなっては因有名詞の姓氏である。此の神主首といふ名は、天武天皇十三年、奉仕の社地名に依り布留宿禰と改められるまでつづいた。

神主

わが角（都農）の里の神主は、どうかといふに、吉野朝廷の忠心都野神主、津野神主、戰國時代の勇將神主内藏之丞等、神職の意味もありはするが、他人の姓名とならべ記されて、前記の神主首の樣に、姓氏として使はれる。又神主といふ村名にも呼ばれ、市町村制實施の際二宮村大字神主となった。

そこで、我が地方の神主といふのは、いつ頃から、どうして出來たかといふ研究が必要になってくる。それは次の童謠を解くことで解る。

いさがうさんは　いしかはの
いしにすられて　こになって
いまはゆざこの　ゆにおはす

いさがうさん。大和の春日率川（イサカハ）に坐ます大神御子神を、角の里飯田の砂川（イサカウ）に分け祀ったもので、砂川佐と申す。佐は樣の意か。方角をさす意のサマや有樣といふ心のサマをサといふことは大古からある國語であるが、さんを敬稱に使ふはさ程古くはあるまいか。サといふ敬稱（平易な）は石見の西部には今に殘って居る。神主全圖三號飯田分二にイサ川サ宅田、六に砂川佐宅田畑あり。今、近重氏住む。

いしかは。惠良川のことで、西隣の砂川に對しては石川といひ、東隣の平田川（地吉川）に對しては平石川ともいふ、人麻呂の妻の歌には、石水（イシカハ）とある。

こになってのこは、子に粉をかけたのである。

ゆざこ（湯迫）。今、木村神主分十二區に、井迫、井迫部屋などあり、佐々木氏住む。井迫は、古い昔に湯が出て居ったので湯迫というたが、後にこちらが止んで、有福の湯谷から出る樣になった

と傳ふユとイとの相通轉訛は、いはみ、ゆはみ、ゆのつ、いのつ、川本の溫湯（ヌクユ）がヌクイ、ゆめ、いめ等まだまだ澤山ある。河野氏の居處まはりを、こちらで、イヤガサコ（伊豫迫）といふを、有福では（イヤダニ）伊豫谷といふ。こちらで湯迫が、あちらで湯谷といふのは、同じ例だ。大和の率川神社は子守社とも云ふ。社傳に、推古の朝大神君白堤始めて社を春日率川に建て、神武の后ヒメタタライスズ媛命を祭る。元正養老中、藤原不比等、狹井（后の父系といふ大物主）、子守（后の生母玉櫛姫）二神を合せ祀る。といふ。

ハツクニシラススメラミコト（建國創業の大英主）の皇后を祭ることは、國家としても又后の父系と稱へる大神（オホミワ）家の者が、言ひ出したとしても、決して惡くはないが、首唱の黒幕に蘇我氏のあったことは、疑のない事實で、蘇我蝦夷の伯母堅鹽媛は前々帝用明天皇、今帝推古天皇の母である。帝室の外戚を一般から尊敬さす伏線で、同じ立場で同じ思想の藤原氏が、蘇我氏の志を成し遂げたではないか。それがやがて自分等の家に向く樣にしたのである。

今一つ、神武の后神を祭る理由は、建國功神フツノミタマを祭り其の上無數の武器を擁して、勢威赫々の物部氏（蘇我大臣の對敵物部大連家の中央政治に關與する樣な目ぼしい者は、もはや倒れたが）の全國に潜む力は、侮ることの出來ぬものがある。そこで別に建國后神を祭って一舉兩得を策し大和の布留宮で事を共にして居る物部連、神主首の一族が、石見國造であったり、ここに七項に分けて記した樣に、豪族として繁延して居るから、石見國にも、率川の宮を建てる必要がある。石見で最も勢力のある社は、建國功神ウマシマチの命を祭る物部神社であることを眼中におきて。

かう調べ上げると、我が角の里に率川宮（砂川佐）を建てたのは、推古天皇の殆ど末年、聖德太子が薨せられてから、皇極天皇の時蘇我氏の亡ぶまで、凡そ二十三年の間であることは、確かである。其の二十三年の間でも、なるべく末に近い方であったらしい。なぜそう云ふかといふに、皇極天皇の次の孝德天皇の時、國の政治が改まって、祭と政（まつりごと）とが分れて（是より前崇神の御世幾分かは分れたが）、石見の國造であった家は、物部神社の神職と安濃の郡領とを兼ねさせても らったが、石見全國の政治からは手を引き、別に石見守が中央政府から任命派遣された。此の時、那賀の郡領は久米臣村部で、祭祀方面は、久米臣と同族で中央政府の布留宮（石上神社）に奉仕せる神主首（市河臣）の支族が、角の里の後に古瀨といふ所に來て司どったと傳ふ。古瀨とは布留山の心、その隣の黒瀨は畔（くろ）山の心。宮ぐろ山の意。神村の瀨層は春崩（せつぐ）で峯崩れだ神主首が那賀郡全體の祭を司どったといふ傳へは、その當時、那賀の郡家が角の里に在ったから、そうであったかも知れぬが、確固たる證據は無い。唯、角の里（後の都農郷、都於（ツノヘ）郷二つを含む）の祭祀を司どったことは後の世まで動かなかった。此の石見に來た神主首が、創立間もなくで、まだ充分手續きを終うして居らぬ率川宮をすったりもんだりデッコクして（やりものつきにして）國家の祭祀から除いて、僅かに、溫泉誘發の爲の溫泉場棚神に貶してしまった。これが童謠の「石川の石にすられて粉になって今は湯迫の湯におはす」といふので、石川は市河に似た音で

暗に神主首を示したものである。

率川さんを貶した年代は、何時かといふに、孝德天皇の大化元年から同天皇の白雉五年まで十年位の間であったらう。それは、有福溫泉の湧出たのを齊明天皇の白雉年中とする古からの言傳へを幾分かでも眞を含むものとすれば、前の話や童謠の事理のよく通って居るのと對照して、かたがた、かうきめることが出來る。孝德天皇は白雉五年十月十日崩ぜられ、翌年正月三日さきの皇極天皇が重祚せられたのを齊明天皇と申し奉り、同天皇の間、年號を建てず元年二……七年等と稱えたから、齊明天皇の白雉年中とは、白雉五年十一月十一日以後翌年正月二日までをいはれる樣にもあるが、中央の崩御即位改元等が天さかる鄙に聞えるには、隨分月日もかかったらうから、さう嚴密にはいはれぬ。

此の樣に長く論じて來ねば、我が地方の誇とする忠臣都野神主、勇將神主内藏之亟の根本も、地名神主の起原や年代も、明かにすることは出來ぬのである。決して面倒臭いなどと思ってはならず。

又童謠は聲音に殘れる寶玉化石と尊重せねばならぬ。

トントむかしであったげな。人が殖えるにつれて、爭ひも起り、わるがしこくもなり、神のまにまにくらしもせず、又そう樂々とくらされもせぬ樣になって、人と人とが殺し合ふまでになった。そこで神樣は、人間世界を洗ひ替へようと思ひ立ち、長雨大雨ドシャブリを來させて大水にされたが、木だの何だの浮く物に乘って助かったものが居るし、おまけに舟を作る樣になって。ますます水の中まで

騷がすことになった。神樣は、これではならぬと、今度は火の雨を降らせ、火の風を吹かせた。これで惡い古い人間の種が盡きたかといふに、賢い者は洞穴の中に入って、穴の口を塞いで、火の雨風が止んでから、ノコノコ出て來て助かった。用意の善い者は石で釜どの樣に造り、蓋石を上げ、中に入って口石をして土で目塗をした。さ樣な穴の中に入って居た賢い者だけ助かったので、それから、アナカシコと申すことが言ひはじめられたげな。火塚といって今に殘って居る洞穴石塚は、その時のかたみである。と、見て來た樣な話が、當地方にも美濃郡にも邑智郡にもある。が、ちょっと考へさせてもらひませう。土穴は中から土を掘りため積み重ねて穴の口を塞がれもしませうが、石塚は皆外から塞いで小丘の樣に土をマンヂウ形に、もりあげたもので、口石を中からしたのは一つもない。そうすると誰が穴に入らずに外からしてくれたか。それは犧牲になるつもりでやった者があったとしても、前々から用意をするには、その未然に、神樣の秘密を漏洩する神が無ければならず、よし又それもあったとしても、外から火の風が、よう入らぬ位に目塗までして、穴の中に入って居れば、中の空氣が呼吸し盡されて、イキが出來ないで、イキて居られぬではないか。實は古墳や穴居の跡が、さ樣な物を造らぬ後の世になって、地震とか洪水とか、その外何かのはずみに一部外界にあらはれた場合に、小さかしい者が考へついた話で、アナカシコのアナは嗚呼の意味で、嗚呼やかましいといふことを、アナカマといひ、アヽうれしいといふをアナうれしといふ、それらのアナと同じで、カシコは、カシコミカシコミ申スなどと同じく、畏れカシコム、恐惶謹言など樣のカシコで、穴に入ったが賢いとい

ふ心では決してない。

寫眞三は、本村に在る暴露された古墳で、宇津巻のしもの吉野朝時代の墳墓と戰國時代の墳墓との間の低い畑や屋敷になって居る地は、もと三四の古墳があった所で、土は掘かへされ、石は石材に使はれた。墓と知ったら、さ樣なことはせぬが、火塚、火の雨塚などいふので、ツイそうされたのだ。神主から都野津に出る右手の小丘字日塚のは、中が八疊敷位ひあったが、明治二十二三年頃道路使用の石材となった。近くに住んで居た石工が打こはしたので名もわかって居る。この日塚は大きくもあるし、近傍から泉川（イヅカハ）とて清水が湧き出で流れて居る位だから、住居にも適せぬこともないが、他は皆小規模で住居にはならず、確かに古墳である。下有福からこちらへ越える所のは、もう發掘されて形もない。千田のは形がない樣になったのもあるが、僅かに穴の一部を存するのもある。これらの古墳は大抵大化改新以前の物で、少しは大化以後のもあるらしい。中央政府では、大化以後、石塚厚葬などを法令で止めさせた樣だが、田舍では、ボツボツ殘って居たらしい。それは埋藏物で時代を知る外はない。

土器

寫眞七、の土器は、前記宇津巻家の墳墓の間、神主首の古墳から出たので、實物によって直に時代を察する好資料で、前に度々述べた天足彦國押人命族石見繁榮第七族神主首の石見來住の年代を證明するに足る物である。

天智天皇崩御の翌年壬申（紀元一三三二）六月、近江朝廷にます大友皇子（弘文天皇）と、吉野にます大海人皇子（天武天皇）との間に、爭ひが起り、七月三日には、吉野方の將大伴吹負は、近江の將大野果安と、乃樂山に戰って大まけに負け、逃げて金綱井に陣した。その滯在中、高市（タケチ）の杜（モリ）の事代主の神が、高市郡の大領高市縣主許梅（コメ）に神がかりして、西道から敵軍が來ると教へられたので襲ひ來た敵が、却て散々に負けて主將は斬られ、部下はにげ走った。これから近江方が負色となり、その七月二十三日には、勝負がきまって、大海人皇子が天位に上られることになった。そこで亂定まって後勅して、神の品を登ぼせ進められた。（後貞觀元年に、從三位高市御縣鴨八重事代主神に從一位を授けられ、延喜式では大社に列せられた）

高市杜座事代主神

多鳩神社

此の高市杜の事代主神を貞觀三年九月朔日分靈したのが、我が角の里の多鳩神社であると、社傳に在るのは、唯頭註抄と一致するのみで、多くの民間傳說に背く。民間傳說とはいへ、タカラフセ傳說、臣（オミ）屋敷傳說、別當大寶坊草創由來等は、皆筋道正しいもので、頭註抄位で、打こはされるものでない祭神、主神に就て、各氏族の間で主張が異なって居たのを、貞觀元年に中央部で、高市御縣鴨八重事代主神が、昇格なさった神威を借りて、こちらでも、翌々貞觀三年頃、事代主命を主神とする說が、勝を占めたので、決して、これが創立でもなければ、初めから事代主命一神に定まって居たわけでもない。次々のべる傳說記錄によって、其のわけが分る。

タカラフセ

これより前、お上へ召し上げられて、石上神宮に納められて居た、タマトの神寶を、キヨミガハラ天皇（天武）の時、返し給はった。そこで、里人が、ひそかに話し合ひ、ソロット清泊のさきの山の中

奔西走忠をぬきんづる迄を、本村隆盛の最高潮期とす。宮の谷が神都として形式を整へたのは、此の時代である。よって其の當時を主とし、古今宮の谷の様を示す。

二宮山布留脊谷一ノ坂から北海に向いて、北西は二ノ森、タカダイ（高臺、高田）山、北東は宮倉、口屋を限り、其の内を宮の谷（神都）とし、國の守といへども、いびきクシャミするを許さず、守護不入の地とす。

もしクシャミ一つしても、許を受けずに一足ふみ入れても、はらひ、アガモノ（贖物）を負はせ附け、威張り高ぶる官人をも、へこましたものである。

神社、建物は無い時代もあったらしいが、タマトの神のこもりますは、今の多鳩山で、拜み場は、今の宮のある所、事代主の宮居は、その拜所の境内である。神主首此の方、布留脊に布留宮立つ、世俗、奥の院ともいふ。神職は同人である。ズット後文安四年に布留宮は、本社に併す。

神主、大古は定まれる神主なく、邑長が祭り、或は、事あるに當り、清人を求めて祭をさせたが、大化に神主首が來て此の方は、其の家で續いて神主を勤める。

神主二ノ五圖イ三二一イ三二二横屋田が神主首の邸宅の跡、江戸時代に大崎氏が、イ三一四大前に邸居するに及び、見下されるを忌みて、荒神松の近くに移った。古く、神主家が布留脊に居たこともある。島星、高田、宮倉の城等に兵を置いたことあるは後に述べる。

ホリ（祝部）、ハフリをホウリと發音するのが、ホリと短くなったものと見える。平安末始まったが血すぢは續かぬ。永祿五年から江戸時代にかけて、大崎氏が大ホリと称へた。（神主といふ普通名詞が、舊神主家の固有名詞に專有されたから。）

コットウ（鼓頭、コントウ）、初めは田中氏。鎌倉時代から、波子二ノ宮氏が勤めたが、大崎氏が大ホリとなって後は、もとの神主渦巻（宇津巻）氏が、コットウとなった。

神主二ノ四圖イ三二九イ三三〇嘉平給、イ二五三から二五八民部屋敷。竹の内。以上田中宅給地

タナモリ（棚守）。ウシロタナモリ（副棚守）古く、神饌掛は誰か分らず。大イサリ、酒部（サカベ）等の氏人が、品物を調へ、其の外宮民氏子等から、献上した。平安末期からは、島田氏がタナモリとなり、後、東氏、門（カド）氏がつとめた。

酒部が宮ノ谷に居たか、どうかは分らず、神村に居たことは明かだ、神村四號圖に坂部、上坂部などあり、あて字だ。そのあて字に依て明治に、坂口、植田などの氏を附けたは、惜しいことだ坂部と分家吉野屋は坂口を称へ、坂部の分家上坂部（ウヘサカベ）と其の分家上坂屋、上野屋とは植田を名のる。

サカベ文右衛門元祿十丑四月六日死、淨水禪定門。

神主二ノ五圖イ三二五島田給、神村二三號圖柏平（島田氏）、机田、机の森。

笛太夫、その道に堪能な者を選ぶ、給田は定まって居る。神主二ノ五圖イ三二三イ三二四田、字名笛

家は神村三八圃に在る。

下モ平は享保十九寅七月吉祥日神村八幡棟札に大工山藤多左衞門、同多右衞門とあるを初見とし淺右衞門、磯右衞門、多右衞門、嘉右衞門、淺七、磯七、利右衞門、萬藏、後の淺右衞門、後の嘉左衞門、常藏、孫次等續き、多く工業に從事す。

藏本は下モ平萬藏を祖とし、文化十丑閏十一月十六日萬藏の子寒庭童子の死を初見とし、萬藏、重七、柳藏、仲次等あり、文政八酉八月二十日に寂した濱田曹洞宗天長山地久寺十二世立足道大和尚は、此の家の出である。

以上及び木村屋は、先祖美濃守の菩提寺曹洞宗長久寺の旦家だ。

同宗太平寺の旦家、松ケ下おつや元祿九子九月二十三日菊由禪童女。松ケ下久右衞門母享保十二未三月二十六日繁室林榮信女。松ケ下文三郎兄寶曆七丑八月二十六日了秋禪定門。松ケ下文三郎明和六丑八月十三日秋覺源冷信士等記され、松吉屋も太平寺に屬す。

松頃面とその分れ松長屋。神村上の森坂屋の分れ森田屋。都野津から來た西田屋等は、眞宗淨光寺派。山藤貞義の家は何れの別れか。

吉野朝廷最後の努力も、地方勤王家最善の奮闘も、足利幕府からは、燈火の消えさうな時の明り、死の前のノタウチと見たので、實に何とも云ひ樣のない悲境となった。

足利の室町幕府から、公卿出の坊城氏を主に、邑知の武將小笠原を副へ、神村中藏の地に來させた。

小笠原は堀、長田近き要害の地に城を設け、城野（ジョウノ）に對して山藤氏を厭し、坊城氏は京より遊女を招き寄せ、地方諸豪の氣を蕩かし、宴飲日を送り、以て福屋、都野、神主諸領に介在して諸將を遊蕩の間に制御するに努めた。大分後戰國時代になってではあるが、福屋は小笠原と婚を通ずる樣になった。

城野は神村三一圃、マナロ、金口、土橋、キダハシの間に在り。

要害は神村二四圃、長田、中手田、藏床、堀、堀溝、犬養、店免、ユウナンざこ等の中に位す。

後神村下野守長武の據った神村城はこれだ、

ユウナンざこは神村二五圃に在り（三〇圃にも）、ユナ（湯女）といふは表面の名で、今の二枚鑑札の遊女であった、ユナの居る迫をユウナのさことといひ、ユウナンざことなったと云ふ。

坊城近く要害との間に在り、又城野の麓にもあり。

坊城は神村二六圃谷ウツ、中藏、上中藏、下中藏と共に在り。忠臣藤原藤房と同祖甘露寺から出た勸修寺の分れで、武家足利の味方だ。

長久寺

長久寺は神村の中央上村山に在り、今は曹洞宗なれど、もとは天臺宗で、今から八百九十年前人皇六十九代御朱雀天皇の長久二年行脚僧（アンギャ）傳正の開く所といふ。元文元年に庄屋から代官に出した書面のひかへが江津町城構飯田に殘って居るのによると

宗等の精進努力の結果、今日あらしめた。（寫眞一一）玄鏡より法燈相繼ぐ十四世現住佛海玉仙に及ぶ。玉仙は美濃郡都茂村大神樂部落開拓の祖田屋梅津氏の出である。（末項美濃郡誌、石見家系錄）

城主

鎌倉時代から原（のち飯田）氏が、飯田の丸池近くの城地ケ内（下有福大金道と敬川道と出合ふ處）に據っても、領主とこそいへ、城主とは言はざった。山藤氏は吉野朝末期からの給地は持って居たが城野に居城を構へたのはいたく亂れてからのことで、これ亦御給人と唱へて城主と言はず。神村下野守をば神村城主といふたが、これも戰國の餘程末に近い頃のこと。神主の宮倉城は宮倉の番所位のもの、クルマキ城は、特別事ある時の據り所で、常の居城でない。高田城は居城ではあるが、それらに據る城主は、遠方に向っていふ時には城主神主氏と聞えようが、居村まはりでは、神職の意味の神主で、それが神域神領を守護するので、別に城主といはず。

（城主と神主）

此の邊で、古く城主といふのは、都野氏の一族で、吉野朝時代から、惠良川、平田川（都野方で城主川地吉川と云）の奥、マルコ、小マルコの邊の地吉山（ヂョシ、城主の訛）に據った家（後に大崎と云）を唯ジョウシュと云うた。それで城主は都野（後の大崎）に專有せられ、神主は神主首の家（宇津巻）に獨占せられて、そう言ふだけで、誰にもよくわかったのだ。（大師は弘法に、開山は親鸞に、大閣は秀吉に取られた樣に）

南北合一、室町時代になると、もと朝廷であった者は、モウ外に發展の餘地が無くなったので、一圖に村内樞要地に占居して、他から犯されぬ用心が、專一の仕事になった。都野支族（後云大崎）が、

（神主花免と横路平田）

舊國府所在地近傍、下地吉（下城主）の地に移ったのは、かう云ふ動機だ。

地吉は神主二ノ二〇圖に在り、下地吉は、二ノ二四の左下隅、二ノ一八の左上隅、二ノ二二の右上隅の三つの圖が、接續する地域である。

もと神主と都野氏とは、俱に王事に勤めた間柄ではあるが、モウ、かうなっては、同じ場所を爭はねばならぬ。即ち都野方の將士の城主や花免に向ふに、神主方の將士横路や平田を以て對抗させたのは、蝸牛角上の爭とは云へ、止むに止まれぬ言ひ掛りとなった。

神主二ノ二四下地吉と横路。二ノ二二下地吉と横路。二ノ一八下地吉と平田、花免と下平田。

それは、相方の言ひぶんに、大分隔りがあり、又當時これを裁く權威者なく、唯武力に解決をまつ外は無かった。飯田都野方は、飯田川に水の流れ込む場所（流域）は、飯田分だと言ひ、神主方が云ふには、惠良高神は神主分で荒人の西、千田の大年迫（オトサコ）を經て上有福の郷に出る道を以て、境界と言ひ張る。彼は水が正直なといひ、是は道が正しいといふ。最後は大段平を抜くより外は無いので、物騒千萬な話。談判は停滯か進行か有耶無耶で分らぬ間に、都野氏は、刃に物を言はせて、マッシクラに、己が所信に向って進行し、一歩一歩地歩を固めて、飯田川を下って、到達した所は、飯田川と惠良川と一所になった地点の東、大崎といふ處で、地は廣くは無いが、古、村部が居たサコ、印鑰のチミヤ、神主の口屋に對するハシヤ（端屋）宮倉に對するスグラ（義倉、守藏）等が、近所にあった四通八達交通至便の地（其の當時の樣で、現今の事でない）で、これで、これ迄主張した所は

數藏四郎兵衛母延寶九酉十二月十四日妙寒禪定尼。四郎兵衛親天和四子七月朔日凉雲禪定門。上數倉四郎兵衛室寶永二酉四月十三日綠林妙陰禪定尼。同後室寶永四亥十二月二十三日傳用淨心信女。數藏庄右衛門父（四郎兵衛事）享保八卯六月五日本覺淨心信士。上數藏孫三郎享保十六亥六月二十日夏淸禪定尼。數藏四郎右衛門父、享保十八丑正月二十八日、全外儀提信士。數藏四郎右衛門安永二巳正月九日祖岳淨眼。同人妻安永二巳二月二十六日抑屋妙綠信女。此の人スグラの分家柳屋から嫁入ったので柳屋（リウヨク）を法名とし柳は綠、花は紅の語に因んで妙綠としたと。上數藏百右衛門は寛政から文化にかけて居た人だ。

下數倉は享保以前分家したので、柳やは安永以前の分家である。スグラは明治になって大前の字を使ひ、柳やは大崎を用ふ。

法學士辨護士大崎林吉は柳やの出で、其の兄は彫刻に巧みで、九州其の他隨分遠方まで行って社寺の建築をした。柳屋妙綠信女の死んだ安永二年より二十三年前の寛延三天庚午九月朔日奉造替石見國那賀郡多鳩神社一宇の棟札に、大工大崎勘六、小工同太七とあり、今から百九十一年前だ。此の家か他の家か。

宮ノ谷の前迫田、十一區の世波屋も大崎氏で、南屋五右衛門子寛延三午六月七日當所世波屋と註したのを初見とす。

下有福の火ノ本、嘉久志の中やも、大崎の分れて、中やは神村に在ったのが、寛政十一未五六

月頃嘉久志新谷に移った。有福治右衛門享保九辰七月十二日蓮外禪定門。有ふく平次郎姉享保十五戌十一月三日、有福彌六親延享四卯二月朔日全心沙彌、有福助右衛門子寶曆十辰六月五日、有福文四郎妻享和二戌五月六日一相妙心信女、

中や市郎右衛門享保五丑五月二十日本立道成信士、中や市右衛門娘寛延元辰十月二十九日、中や市右衛門妻寛延三午四月七日梅や妙枝信女、上村仲や五三郎妻寛政十一未四月朔日隱窓妙逸信女（夜明院隱窓妙逸大姉と引直す）カクシ中屋武右衛門子寛政十一未七月二十三日、カクシ中屋武右衛門妹寛政十二申四月三日靈窓妙機信女。カクシ中屋友次郎父寛政十二申四月二十二日閻覺良浮信士、

都野支族が城主である城を、花免や地吉は共に守ったので、自身城主ではない、併し、城主が數度城をかへ移ったが、もとの城には幾分かの安備を置いた、それを、一般人からは、やはり城主と称へて居た。それは、まちがひだけれど、しかたがない、日曜が休暇だから、何の休暇でも日曜といふ人、お中をスカして蟲藥を飲んで十二指腸を下したと平氣でいふ人、男僧が比丘で、女僧が比丘尼だのに、それをビクといふ者、ヨメニクイといはれる姑（シウトメ）をシウト（舅）と讀む者、門跡（モンジキ）は皇族出家である筈だのに、即位の資を献じた賞として、准門跡（ジュモンゼキ）となった本願寺主を、門徒は御跡門樣と呼ぶ、本村で城主といふ語は、此の變體に屬するものがある。太平寺の過去帳を見れば、次の樣に書いてある。